

2024年7月
通巻第59号
季刊 2024-III

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：吉野 隆

メキシコ歴史文化講演会：2024年第1回

「アステカ王国 —歴史の実像と宗教観を探る—」

専修大学国際コミュニケーション学部
教授 井上 幸孝

はじめに

メキシコ歴史文化講演会は2024年、コロナ禍を経て久々に対面での開催が復活した。今回の講演会は、昨年から今年にかけて国内3か所（東京国立博物館、九州博物館、大阪・国立国際美術館）を巡回した特別展「古代メキシコ—マヤ、アステカ、テオティワカン」にちなみ、メソアメリカを代表するこれら3つの文化・文明がテーマとなった。講演会の第1回は主にアステカ、第2回はテオティワカン、そして第3回はマヤをそれぞれ扱うという構成である。

筆者が担当した第1回は、3月21日にメキシコ大使館において対面形式で催された。偶然とはいえ、この日はメキシコ初の先住民出身大統領として知られるベニート・フアレスの生誕記念日であった。会場の“エスピオ・メヒカーノ”には60名近い方々にご参集いただいた。この第1回講演会では、アステカ王国を主題としつつも、メソアメリカ文明全般のパノラマを示すということもその目的とした。



メソアメリカ文明

メソアメリカでは、前2000年頃に文明が芽生えた。メソポタミアやインダスなどの旧大陸の文明と同様、アメリカ大陸ではメソアメリカ（メキシコと中米）とアンデス（南米）の2つの地域において、固有の文明が開花した。メソアメリカ文明とアンデス文明はしばしば同一のものであるかのように混同されるが、まったく別の文明である。両者の間には、共通点や似通った点もあるものの、同じアジア地域の黄河文明とインダス文明が別物であるのと同じように、これら両文明は別物である。

一般に「古代」や「古代文明」という言い方がなされるが、この言葉が与えるイメージにも留意が必要である。メソアメリカ文明は前2000年に始まるものの、その最後はスペインの侵略を受けた16世紀である。つまり、西洋史や日本史の「古代」に該当する時期だけでなく、「中世」も合わせたほどの長期間がメキシコでは「古代」と呼ばれているわけである。この3500年を超える長い期間は、大きく先古典期（または形成期、前2000～後200年）、古典期（後200～900年）、後古典期（後900～1521年）に分けられる。

本講演の前半では、まず、このメソアメリカ文明の概要について述べた。メソアメリカという文化領域の範囲は時代によって変動したものの、北部を除くメキシコ全土、グアテマラ・ベリーズ・エルサルバドルの全土、ホンジュラス・ニカラグア・コスタリカの一部がその地理的範囲に該当する。農耕に基づいてトウモロコシを主食とし、神殿ピラミッドを建設するなど共通する文化要素がメソアメリカで栄えた各文明や文化の間に広く見られる。また、宗教に関しても、地域や時代ごとのヴァリエーションはあるものの、多神教を・

= 目次(案) =

- | | | |
|---|--------------|------|
| 1. 第1回講演会報告：「アステカ王国—歴史の実像と宗教観を探る」 | 専修大学 教授 井上幸孝 | ...1 |
| 2. メキシコ短信(政治)：メキシコ初の女性大統領10月1日就任・国会は与党連合圧勝・9州知事は7州制覇 | | ...3 |
| 3. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ—人旅 11—サン・ファン・デル・リオ」 | 会員 阿部修二 | ...4 |
| 4. 報告：練習帆船クアウテモック号が横須賀寄港 | | ...7 |
| 5. お知らせ：北川民次展—メキシコから日本へ / 第23回 Fiesta Mexicana2024@お台場 / あとがき | | ...7 |

構成する様々な神のみならず、宗教・生活の基盤となる諸概念がしばしば広く共有された。マヤやテオティワカンはもちろんのこと、オルメカ、サポテカ、ミステカ、トルテカ、プレペチャ（タラスコ王国）、メシーカ（アステカ王国）などはいずれもメソアメリカで栄えた文明や国家である。

アステカ王国の実像

続いて本講演では、絵文書や征服後にアルファベットで記された史料に基づきつつ、アステカ王国の実像に迫った。アステカ王国の歴史は、かつてはアストランという神話上の地から到来したメシーカ人が、守護神ウィツィロポチトリの神託に基づいて 1325（または 1345）年にテノチティトランの都を建設し、やがて勢力を拡大して強大な王国を築き上げたという半ば神話的なストーリーに基づいて語られてきた。すなわち、一昔前までアステカ王国の歴史が語られる時には、征服後まもなくメシーカ人が書き残したり証言して残したりした話そのまま歴史的事実として扱われる傾向にあった。

しかし、後古典期後期（1150～1521年）のメキシコ中央部の歴史に関する研究が進み、とりわけ史料の解読や解釈が大きく前進した。その結果、現在の研究状況においては、メキシコ中央部の後古典期後期の政治史についてははるかに詳しいことが分かってきている。テノチティトラン建設に至る神話的語り、対外支配を広げた「征服者」メシーカ人の公式見解だけではなく、他の都市や集団の観点も取り入れたいわば客観的なアステカ王国の盛衰を考えることが可能になってきている。

例えば、アストラン出発からテノチティトラン建設に至るメシーカ人移住の「歴史」は、他の諸都市国家の住民が有していたのと同様の「起源神話」の一種であると、現在では多くの研究者によって見なされるようになってきている。



図1:アストランを出発するメシーカ人『ボトゥリーニ絵文書』

アステカの宗教観

本講演の後半では、史料などから再構成されるアステカの宗教とその背景にあった思想について、実際の考古資料とも関連づけながら見た。ウィツィロポチトリ誕生の神話、ケツァルコアトルによる人間の創造の神話からは、神話というものが当時の人々にとっての「いま」と直接につながっていたものであることが見てとられる。独自の世界像や2種類の暦（365日暦と260日暦の併用）も、当時の人々の生活に深く関わっていた。「還暦」に当たる52年毎に催された新たな火の儀礼、アステカ王国の実態が3つの都市（テノチティトラン、テツココ、トラコパン）の同盟から成っていたこと、テノチティトランが4つの地区に分かれていたことなどは、こうした世界観や暦が日常に色濃く反映されていたことの例である。

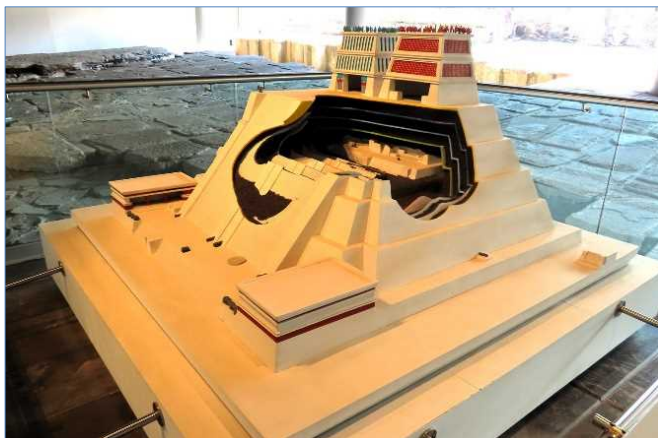


図2:コアテペクでのウィツィロポチトリの誕生が視覚的に再現されたテノチティトラン大神殿の復元模型(左図)。向かって右側のウィツィロポチトリ神殿の階段下には、敗れ去った月の女神コヨルシャウキの石板(右図)が置かれた。



アメリカ大陸二大古代文明の意義

特別展「古代メキシコ」は多数の来館者を得て、巡回の最後となる大阪会場は5月6日に無事に閉幕を迎えた。けれども、これが一時の流行で終わるのではなく、本邦でのメキシコの古代文明、さらにはペルーの古代文明というアメリカ大陸の二大文明への注目や関心が今後も続くことを願う。幸い日本における古代アメリカ大陸の文明についての情報は着実に増えてきている。例えば青山和夫氏、坂井正人氏、大平秀一氏と筆者との共著として出版された『古代アメリカ文明—マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』（講談社現代新書、2023年12月刊）も現在の研究状況に見合った成果を盛り込んだものである。とはいえ、「大河に生まれ」、「鉄器へ向かう利器の進化を遂げた」文明のみが真の文明であるかのような、時代遅れの見方が根強いのも事実で、日本で長らく用いられた世界史の「四大文明」史観の弊害がまだ残っている（ただし、実際には日本の学校教科書から「四大文明」という表現が消えて久しい）。人類の歴史、文明の歴史を客観的に捉え直すためにも、アメリカ大陸の古代文明が果たす役割は大きなものになると言えるだろう。（了）



メキシコ史初の女性大統領 10月1日に就任 クラウディア・シェインバウム前メキシコ市長が当選 ～与党MORENAが各種選挙で圧勝～

メキシコで6月2日に投開票された大統領・上下両院議員・9州知事などの各種選挙で、与党MORENAを主体とする与党連合がいずれの選挙でも野党連合に圧倒的な勝利を収めた。本稿では三大選挙結果を概観する。なお、大統領選挙の経緯は本誌第56号(2023年10月)と第57号(2024年4月)を参照願う。 まとめ：編集人

大統領選挙：シェインバウム氏が60%得票し圧勝

連邦選管(INE)6月8日付け発表では、与党連合のクラウディア・シェインバウム前メキシコ市長が得票率59.76%、得票数3,592万票とメキシコ史上最大の国民の支持を獲得して当選し、第2位の野党連合ソチル・ガルベス前上院議員(27.45%、1,650万票)、第3位のホルヘ・アルバレス前下院議員(10.32%、620万票)を圧倒した。投票率は61.0498%。

今後、9月6日までに新議会で大統領選挙の結果を確定し、新大統領は10月1日に就任する。任期は6年で再選絶対不可。

| | | |
|----------------------|----------------------------|-------------------------|
| | | |
| Jorge Álvarez Máynez | Bertha Xóchitl Gálvez Ruiz | Claudia Sheinbaum Pardo |
| | | |
| 6,204,710 | 16,502,697 | 35,924,519 |
| 10.3213% | 27.4517% | 59.7594% |

(出所) INE：[Cómputos 2024 \(ine.mx\)](http://ine.mx)

シェインバウム新大統領は与党 MORENA(国家再生運動)所属で、PT(労働党)・PVEM(緑の党)との共闘で、事前の支持率調査どおりに当選を決めた。次点のガルベス氏はメキシコ三大伝統政党のPAN(国民行動党)に所属し、PRI(制度的革命党)・PRD(民主革命党)の野党統一候補として立候補したが、ダブルスコアで敗北した。第3位のアルバレス氏はMC(市民運動)の単独候補だった。

シェインバウム新大統領圧勝要因の第一は、与党政権を率いるロペス＝オブラドール AMLO 現大統領への高い支持率で、7月下旬調査でも64%強の高率を保持している(El Economista 紙7月26日)。第二は新大統領の掲げた公約が総じて“AMLO 的”であること。主に低所得者の生活向上に照準を合わせた内容で、女性年金支給年齢の65歳から5歳引き下げ、公立幼小中児童への奨学金支給(注：メキシコ市で実現)、全国鉄道網の整備、「100の公約」など、財政出動型政策を列挙した。第三はメキシコ市長時代の実績を全面的に打ち出し、実行力ある政治家を売り込んだこと。環境学者市長として脱炭素＝住宅等屋根での太陽光発電推進、治安改善＝殺人件数半減・凶悪犯罪減少、最賃制拡充などを実現した。

他方で「弟子と師匠」と時に揶揄される新旧大統領の人間の親密性や政策的親近性を、これからの政策実現に際しての課題として懸念する声もある。

上下両院：与党連合圧勝し憲法改正が可能に

上下議員選挙の党派別議席配分は、異議申し立て審査を踏まえて8月23日までにINEが確定する。

INEの6月18日付け暫定党派別議席案によると、下院500議席のうち与党連合は364議席を獲得し、憲法改正可能議席(Mayoria calificada)の3分の2を超えた。しかし、上院128議席では83議席に達するも改憲に必要な85議席に2議席及ばない。

暫定政党別議席は下院で与党連合のMORENAが236、PTが51、PVEMが77の計364議席。野党連合のPANが72、PRIが35、PRDが1の計108議席。MCが27議席。諸派が1議席。

上院では与党連合のMORENAが60、PTが14、PVEMが9の計83議席。野党連合のPANが22、PRIが16、PRDが2の計40議席。MCが5議席。

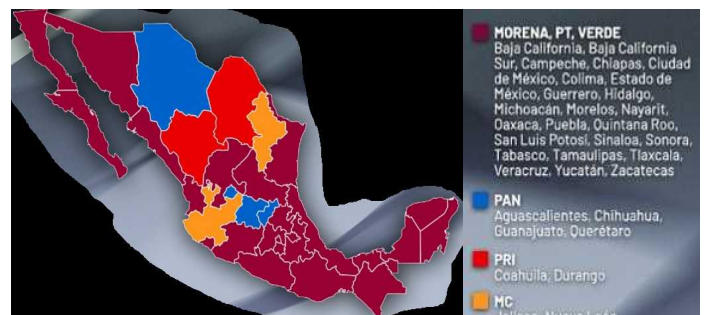
新国会は9月1日に招集される。AMLO 現大統領が2月に国会提出した改憲を含む改革法案「プランC」を、10月1日の新政権発足前に審議開始することで新旧両大統領は合意している。なお、プランCは司法・選挙・安全・年金・電力庁 CFE などの広範な改革法案である。

☆編集子付記：PRDは国政選挙での法定得票数(3%)を3回連続未達ゆえに、全国政党登録と26州での州政党登録を抹消へ。州政党登録の継続は6州。PRDはAMLO氏がMORENA創設前に所属した中道左派の伝統政党で、各級議員や首長選挙での消長はメキシコ現代政治の変化を象徴する。

9州知事選挙：与党連合が7州制覇

メキシコ市を含む9州の州知事選挙でも与党連合は7州を制した。メキシコ市ではクララ・ブルガダ前イスタパラパ区長が接戦を制し、首都では女性市長が2代続く。8州のうち野党勝利は2州のみで、与党連合は全32州のうち24州の知事を確保。野党知事はPANが4州、PRIが2州、MCが2州。

知事の党派別所属一覧図



出所：<https://www.excelsior.com.mx> より加工転載

ぶらりメキシコ人旅 —「銀街道」の難所：サン・ファン・デル・リオ— (San Juan del Rio)

メキシコ・日本アミーゴ会 会員
写真家・ルポライター 阿部修二

はじめに

前回紹介したヒロテペックで歴史学者パコから、征服者コルテスの通訳としてアステカ帝国征服に係わった先住民女性マリンチェがその恩賞として館を建ててもらったと聞いて、私はこの目でそれを見ようとサン・ファン・デル・リオの町を訪ねることに決めていた。

メキシコ市に住むクリオーリオの友人 D にその話をしたら、彼女の親戚の老夫婦が週末にサン・ファン・デル・リオの別荘に行くので、そこに泊めさせて貰えば良いとしきりに勧めるものだから、気が乗らなかったがそうすることにした。その老人の息子ルイスが親の後を継いでサン・ファン・デル・リオ近くにランチョ（農場）を営んでいるので、もしかしたらそれを見ることが出来るかも知れないという期待もあった。だが、その期待とは裏腹に、私たちが着いたのは、サン・ファン・デル・リオ市の中心に近い普通の家で、都会暮らしに疲れた老夫婦のお休み処だった。

メキシコ市から車で2時間半。私たち3人を下ろして、息子ルイスはランチョに戻っていった。老夫婦は水道とガスの出具合をチェックし夕食の支度に取りかかった。もちろん私はその別荘の事情を理解していないので、その晩は客人に徹することにしたのだった。奥さんの手料理を戴いている時だった。突然食卓の灯りが消えた。停電。町全体かと思っただが、街灯は点いている。この家の停電だと気づいたが、高校は電気科卒、大学は電子工学科卒の私でも、メキシコの電気事情は皆目分からないから、対処しようがない。セニョールが配電盤のヒューズだと言



出所:San Juan del Rio (Querétaro) - Wikipedia

って私に見せてくれたのは、まるで散弾銃の薬莖、単三乾電池を一回り大きくしたようなもので日本では見たこともない代物だった。これで一件落着くと思いきや、配電盤は施錠されていて合鍵がなければ開けられない様になっていた。ロウソクの明かりを頼りに、30 以上もある鍵の束から高所にある配電盤のその一つを探し出す役目は若い？私の役目となった。トライ&トライの結果、配電盤の合鍵が見つかり、ヒューズを取り替えてめでたしめでたしとなったが、それからはなるべく電気を消して省エネに努めた。でも何処かで漏電しているようだ。夜が怖かった。案の定、私は暗闇で眼鏡に腰掛けて壊してしまった。

サン・ファン川は“大河”だった

サン・ファン・デル・リオはヒロテペックの収税領主でマリンチェの夫ハラミージョの支配地だったが、今日ではケレタロ州の玄関口となっていて植民地時代には銀街道の宿場町として栄えることになった。500 年も前には定住する人もない、狩猟採集民族チチメカ族の一派パメ族が短期間滞在するだけの、アステカ帝国も支配をためらう辺鄙なところだった。

スペイン植民地時代、この地が首都メキシコ市と銀鉱山サカテカス市とを結ぶ「銀街道」の線上にあったために交通の要所として発展をみることになった。しかし、メキシコの他の町の様に教会を中心とした基盤の目のような都市とはならなかった。すなわち、小さな集落が必要に迫られて徐々に拡大していったために、道が複雑で私のような旅人にはやっかいな町である。前回のヒロテペックの町がアステカ帝国の辺境であった理由は、今日の州境近くを流

れるサン・ファン川が自然の要塞となっていたからだ。そのためにサン・ファン川は大河だと私はすっかり信じていた。

翌日、その日は土曜日で早朝だということもあって役所は扉を閉じていて、この町の情報を手に入れることがかなわなかったために勘を頼りに町を歩く羽目になった。珍しく小雨で私の足を鈍らせたが、まずは前述のサン・ファン川を見たいと思って歩き出した。今日ならスマホの GPS を頼りにすることができるが、当時の私はそれを持ち合わせていないから、迷いに迷った。以前、ケレタロに行く時にバスが途中停車したこの町のバス駅に行けば情報があるかも知れないと思い立ち、道行く人に駅までの道筋を聞きつつそこに辿り着いたのだった。だが、案内所はもちろん印刷物もない。残念ながらここは観光地ではないのだ。バス駅は蛇行するサン・ファン川の傍らにあった。川だ！と分かったのは水を求めて

生い茂る背の高い糸杉の並木がバス駅から見えたからだ。さらにそこから対岸の岩壁の上に、ピラミッドのようなものと十字架が立っているのが見える。歴史的に重要な場所。直感的に、その丘はチチメカ族襲来を監視するアステカ帝国北辺の駐屯地だったので私は思った。そこから対岸に渡ろうとしたが、残念ながら有刺鉄線に行く手を阻まれる。



バス駅から崖の上のピラミッドと十字架が見える

さて、「銀街道」のかつてのチチメカ領域（メキシコ北部）への接点サン・フアン川には立派な石橋があることを「ケタロ州歴史概論」で読み知っていたので、それが何処にあるのかをバス駅の切符売り場で尋ねてみた。この町の主要道ファーレス通りの東の端にあるという。つまりファーレス通りは「銀街道」の一部であることを知った。道はカーブすると同時に途中から道幅が狭くなっていて、もともとは馬車がすれ違えるほどの道幅だったようだ。私はまず、その橋の規模に驚き、ややあって納得もした。



1710年建造の銀街道の石橋

長さは100メートルを越えている。かつてここを銀の延べ棒、あるいは鉱山に必要な食糧や物資を積んだロバや馬車の隊商が行き交っていたのだ。石橋は車がぎりぎり二台すれ違える中で、歩行者がそこを通るのは命がけである。私は石橋の中央にある年号を刻んだ銘板を撮影しようと、その橋に進入したが、スピードをゆるめることなく車が走り過ぎるので、こちらは気を抜けない。



石橋中央にある銘板には1710.2.9の文字が

さてサン・フアン川だが、ほとんど水はなく、川底が見えている。この土地の歩行者は橋の上を通らない。理由は危険だからだが、水面から顔を出している石を渡り継ぐことができるからでもある。この川が本当に自然の要塞だったのだろうか。聞けばダムができたことにより、水位が下がったのだという。



建物の描かれた豊富な水と橋



高い枝に布きれ。時には水位がここまで

河川敷から頑丈な石橋を見上げれば、恐竜の股下にいるアリの気分だ。察すれば、かつてはかなりの水量があったようだ。橋の中央の銘板には1710年2月9日の日付があり、植民地時代も中期のものだから、それ以前には浮き橋程度のものが架かっていたと思われる。被征服から25年後の1546年、北部の未開地サカテカスに優良な銀鉱脈が発見されると、「銀街道」は重要なものとなった。町はその橋の通行人や商人、荷馬車の馬子から通行税を徴収したというから、そのことでこの町が十分に潤うことになった。だが、大雨が降るとたちまち通行が遮断されてしまう難所でもあったという。そこで、1710年にスペイン人建築士ペドロ・デ・アリエタによって今日見ることのできる壮大な石の橋が建造されたのだという。



石橋を渡るとファーレス通りは幅が広がりカーブする

マリンチェの館

私がこの町を訪ねてみようと思ったのは冒頭の通りだが、このサン・フアン・デル・リオのどこかにはあるはずのマリンチェの館を探し回ることになった。先のファーレス通りの古い建物を中心に探し歩いてみたが、残念ながら徒労だった。

町の観光案内所を探して私は「メソアメリカ大学」の看板をファーレス通りを見つけ、だめ元で中に入って尋ねてみた。門のすぐ脇に図書室があり、そこで司書の女性が二人の女子学生に應對していた。私はマリンチェの館を探していると話すと、司書は首を横に振ったが、私達のやりとりを横で聞いていた一人の女子学生が少し間を置いてから、「ラ・ジャベ（ジャベ家）だ」という。司書はケレタロ州観光課が出しているパンフレットを持ってきてくれて、その表紙の写真が「ラ・ジャベ」だと教えてくれた。私はマリンチェの館が現存することを知って宝物でも手にしたように嬉しかったが、さらに驚いたのはそれがヨーロッパ風の大宮殿だったからである。



ラ・ジャベのアシエンダの入り口

(注：マリンチェの館はその後ジャベ家のアシエンダ（大荘園）になったために、建て替えられたか、拡張された可能性がある。)

マリンチェの館、すなわちラ・ジャベは旧市街から5 kmも北の市境にあった。そこは植民地時代のアシエンダで、現在はメキシコ陸軍がその建物をまさしく占領していた。私はその写真を一枚カメラに納めたかった。観光パンフレットに使われているのだから、陸軍の施設であってもきっと撮らせてくれるに違いないと思い、さっそくタクシーを走らせてそこを訪ねたのだった。



ラ・ジャベのアシエンダ。現在は陸軍施設

タクシーが広大な貯水池に築かれた、まっすぐ北に延びる1 kmほどの堤道にさしかかった時、湖面に浮かぶこんもりとした屋敷森を目にしてその規模の



貯水池の壁を作る直線の堤道



堤道下に耕作地を潤す貯水池の水門



テスココ湖に浮かぶテノチティトラン(民族学博物館)

大きさに驚いてしまった。コルテスがテスココ湖に浮かぶアステカ帝国の首都テノチティトランをイメージして造らせたのではないか。

屋敷は100 x 400 平方メートルの高い塀が外界を拒絶するような敷地の中にあり、その両翼にかつてのアシエンダの労働者の家が集落を作っていた。枝を大きく広げる樹木のせいで中の建物が良く見えない。鉄格子の向こうで銃を手にした門兵がタクシーから降りた私の行動を監視している。私は緊張のあまり引き返そうと思った。だが、ここまで来て私の目的を放棄するわけにはいかないと思い直し、勇気を振り絞って門兵に建物の写真を撮りたいのですがと尋ねてみた。私が提示したプレスカードを見てから、彼はここで待つように言うと言官に是非を伺いに詰め所に行ったが、彼はすぐに戻ってきて、「ノー」と一言。それでも建物を撮るだけだと言って説得を試みたが、だめだという。武器を手にしている者を刺激するのは得策ではないと考え、私は重苦しい雰囲気鉄格子の外に出た。メキシコ陸軍にとっては秘密の施設なのだから当然と言えば

当然かも知れないが、観光パンフレットの表紙に写真を使っておいてと、憤りを押さえきれなかった。それでは遠目からアシエンダの正面ゲートだけでもと思って、バッグからカメラを出そうとした途端、門兵が近づいてきて、威圧的な態度で写真はだめだという。しかたないのでカメラをバッグにしまい、白い壁伝いに歩いてみた。

どうしても、写真が1枚必要だった。しかし、塀越しに建物の両翼に円筒状の監視塔が見えていて、そこからはこちらが丸見えである。もし見張りが私の不審な行動を塀の外に見つけたら、日本とメキシコの外交上の問題になりかねないとも思ったが、意を決してその館を何枚か撮影した。急いでメモリーを靴の中にしまい込み、平静を装うとするが、心臓はドク、ドク、ドクと音を立てている。今でもあの時のことを思い出すたびに胸が苦しくなる。

マリンチェが幼い娘マリアを残して短い生涯を終えたこの館を訪ね目にしたことで、アステカ帝国滅亡のあの事件が私の中で単なる歴史ではなく身近なものとなったのだった。

(注:ラ・ジャベのアシエンダに関しては拙書『銀街道』紀行「メキシコ植民地散歩」(未知谷、2010年)を参考にされたい。)

[写真複製不可] [連載その11完]

阿部修二会員に「ぶらりメキシコ人旅」と題して、メキシコのあちこちを訪ね歩いたエッセイを連載していただいています。

- 第1回(2022年1月号):トラスカーラ
- 第2回(同4月号):ケレタロ
- 第3回(同7月号):ハルパン&コンカ
- 第4回(同10月号):ランダ、ティラコ&タンコヨル
- 第5回(2023年1月号):シリトラのエドワード・ジェイムスの庭
- 第6回(同4月号):イダルゴ州の奥座敷「良く肥えた土地」アクトバン
- 第7回(同7月号):イダルゴ州の奥座敷2:サン・アンドレス・ティアングステンゴ
- 第8回(同10月号):イダルゴ州のもう一つの奥座敷3:イスミキルバン
- 第9回(2024年1月号):テボツォトラン
- 第10回(同4月号):ヒロテベック
- 第11回(同7月号):サン・ファン・デル・リオ

阿部さんは2005年よりアミーゴ会会員。1947年岩手県花巻市生まれ。岩手大学工学部卒及び桑沢デザイン研究所ビジュアル・デザイン科卒。日本写真家協会元会員。メキシコ教会美術に惹かれ1986年より毎年渡墨。2005年以降4冊のメキシコ関係書籍を発行。最新作は『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』(2021年9月刊 明石書店)です。

[写真転載不可]

<編集部>

報告 帆船クアウテモック号が横須賀寄港

メキシコ海軍の練習帆船クアウテモック号、別名「海の騎士」が海上自衛隊横須賀基地に入港。7月6~9日に艦内一般公開。同船は1982年就役。全長67.16m、幅11.99m、排水量1,800ト。操船乗員200名と士官候補生90名が乗船。「日墨友好関係樹立415周年記念」(注)の寄港。前回は2017年東京晴海ふ頭。



出所:メキシコ大使館 HP

(注)1609年9月30日、マニラからメキシコのアカプルコへ向かうサン・フランシスコ号が岩和田村の田尻沖(千葉県御宿町)で嵐に遭い座礁。岩和田村の村民総出で救助に当たり、凍えた乗組員を素肌で温め衣服や食料を提供。乗組員373人のうち317人の命を救助と伝わる。。

お知らせ

生誕130周年記念

北川民次展 -メキシコから日本へ-



北川民次(1894~1989)は1920年代のメキシコで壁画運動時代に画家、教育者として活躍。1936年帰国後も作品や著作を発表。時代に翻弄されつつも逞しく生きる市井の人々とその生活を描く。温かな視線は群像表現から何気ない風景画にまで通底。

☆第2会場:世田谷美術館

会期:9月21日(土)~11月17日(日)

詳細:<https://www.setagayaartmuseum.or.jp/>

☆第1会場:名古屋市美術館

会期:6月29日(土)~9月8日(日)

詳細:<https://art-museum.city.nagoya.jp/>

お知らせ

第23回

Fiesta Mexicana in お台場 Tokyo 2024



第23回 Fiesta Mexicana(フェスタ・メヒカーナ)が今年も9月14日(土)-15日(日)-16日(祝)の3日間、お台場デッキ・ウエストプロムナードで開催。9月16日(日本時間9月15日)は1810年にイダルゴ神父が独立の叫び(Grito)を上げた日で、メキシコの独立記念日。会場ではメキシコの伝統音楽・民族舞踊、世界遺産の料理や飲料、民芸品・アクセサリ、観光などなど、様々な角度からメキシコをまるごと紹介。アミーゴ会も後援。

お台場が3日間、メキシコになります!!

詳細:[HOME | fiesta \(fiestamexicana-tokyo.com\)](http://HOME | fiesta (fiestamexicana-tokyo.com))

あとがき:メキシコ初の女性大統領クラウディア・シェインバウム氏が10月1日に就任します。総じて女性の社会進出が著しいメキシコですが、その陰には家庭内労働者=お手伝いさん(muchachas)として法定外の低賃金で生活の糧を得る多くの女性たちがいます。メキシコの歴史的社会的不平等の克服が新大統領の直面する重要課題の一つです。乞うご期待。世界的な異常気象は日本でも灼熱と大雨の日々をもたらしています。セミたちは朝夕は賑やかですが日中は静まりかえっています。パリ五輪の熱気に期待しますが編集子は最早カウントダウン前。と、本誌発行大幅遅延の責任転嫁の常套手段。お詫びあるのみ。会員読者のご寄稿を鶴首。 [20240729か]